

文學博士 姊崎正治編著

眞徧州山詩集

上

京都 平樂寺書店刊

引

艸山の元政上人、信篤く解深く、山谷に隱棲しつつも、出でては經行托鉢して人を教化し、入りては老親に事へて至孝を致す、江戸泰平の世に僧風の廢頽するを慨して、自ら戒行を嚴にし、又教理談義の空論を避けて深く禪觀を修す、折伏の威烈に乏しきも、三學具足を目標として、自らの嚴肅を以て他を率ゆ、世俗を離れて風月を愛し、禽蟲を友とし、心自ら天地に通ふものあり、而かも單に風雅風流に墮せず、詠嘆感慨を詩歌に寓しては、天真獨朗の聲を發し、事に觸れ物に應じて、自然に三觀の妙致を具ふ、是れ一はその明朗至醇の天性に出づるも、亦信解戒禪の修養が自ら湧出して性靈の詠

となりしに外ならず、

* * * *

是れ實に四年前、海外旅行の間、艸山集の詩篇に親炙し、その幾分を和詠して、百首を編せし時の記なり、次の年、再び旅路の友と艸山集を携へて、漸く和詠の數を加へしが、その九月、ロンドンの戰禍を避けて、袖の海に臨む江濱村莊に留まりし間、その稿を整へぬ、かくて和詠千餘首の稿を郵便に托して故國に發送せしは、九月下旬、此種の郵便が禁止せらるる數日前なりき、其より十月十日、避難船に乗じて英國を去り、再び大西太平の兩洋を航する間にも、艸山詩は常に船路の伴侶なりき、歸朝後一年の間、時に觸れて和詠を加へ、詩偈の大部分を盡し、一昨年十月下旬、艸山庵室の會に參ぜ

し時、和詠の稿本を上人の墓前に捧げて、聊か追薦の意を表しぬ、

君がうたうつしし心みそなはせ

わがことのははつたなきままに

かくて、印度、太平、大西の三洋、各二回の長き潮路により出でし艸山詩和詠は、當時にありては、只己が心の慰に過ぎざりき、然るに艸山の庵室にて平樂居主人に會し、その勸によりて、先に私刊せし孝心篇を公刊するに至りしも、其他は尙ほ躊躇して一年餘を経たり、即ち全部の刊行には、和詠の外に詩句の和訓を附せんことを慫慂せられしも、その煩を敢てせざりし爲なり、然るに今時の人、漢詩の讀方に馴れざるも多かるべく、上人の人格風韻を世に知らせん爲には和訓

の要もあるべしと考へ、筆を進めて一年にして成り、今之を
剗削に附するまでに至れり、

今や大戦のもなか、世界は一變せり、三百年前の詩文は現
代に縁遠き感なき能はず、而かも高潔なる人格の光は、時移
り世は變りてもうつろはず、人の心に達觀の明を投じ、安立
の地を與ふるに足るものあり、人生、動裏に靜あり、靜中に
動あり、上人の行學と詩想と、共に利害禍福を超越して、天
地の心に徹し、人生の眞を捉へし跡を傳ふ、戰亂勃發の時、
空襲警報ひびき互る間、又脅威出沒の海路に、暴風怒濤を凌
ぎし間、この艸山一集を手にして、心を鎮め念を練り得し己
が體驗を思へば、この一集を今の世人に供するも、敢て沒分
曉の學にはあらざるべし、

他方、同じく海外旅行の間に於ける漢詩和詠は、先にその大部分を公刊せしが、世の劇務に従事する人々の間には、動中靜の伴侶として之を袖中に携ふる向もあるを見れば、這裏の希向の必しも唐捐にあらざるを思はしむるものあり、且つ又余が漢詩和詠の三千數百首は、如何に支那風の詩想を我國語に寫し得るやを示さん試みとして、隣邦の詩人をして和歌に對する感興を起さしむる料となることもあらんか、この和詠は歌人の作ならざるも、上人の原詩に參照して、漢詩と和歌との連鎖となり、今後二者の交流を助長する一端とならんことなしとも云ひ得じ、

但し、詩歌そのものは元政上人本來の志にあらず、余も亦詩歌を事とするものにあらず、只、上人が明朗至醇の天性、

信解戒禪の鍛錬、中道透徹の達觀が、その詩偈を通じて、又その面影を傳へんとするこの和詠によりて、幾分にも今と後の世に傳はらんことを希ひて、此集を世に送り出す、

ことのはにとはの光のきらめきを

あふぎ見ん人よにはあらなん

昭和十七年十月五日

亡父の祥忌

正

治

編 旨 要 目

(一) 本書は艸山集中の詩偈をその内容によりて彙類し、意義内容の關聯に依りて十篇を分つ、十篇以外に、身延行記の詩を別に列す、

(二) 一詩にして内容の重複交叉するものは、或はその部分毎に分ちて、二篇又は三篇に編入し、或は兩方に重出す、重複しても内容に主従を分ち得べきものは、主の篇に掲げ、従の篇には題目のみを記す、

(三) 各詩篇の上に記せる數字は、詩の番號なり、即ち集三十卷の中、第十四乃至二十四の十一卷は、詩集にして、その中にある千五十一首に番號を附したるもの、その目次は本書卷尾に番號と共に再録せり、右詩集外に、前十三卷と後六卷とは文集なるも、

その中に詩偈の散在するものあるを以て、その文章の番號を前と後とに分ちて附す、番號の上に稱心とあるは、稱心病課の詩にして、艸山集に收めざるもの、病課全部の詩の番號を示す、

(四) 同一篇中に於ける詩の排列は、一般に原集の番號によるも、回向、四季、物象、禮讚の四篇にては、題目によりて彙類し、同一類の中には番號による、身延行記の詩は旅程の順序による、

(五) 詩篇題目の下、括弧内の數字は、原集の卷數と丁數を示す、丁數は、一般に詩の始の處在を示し、長編は始終を示す、活版本艸山集には柱に丁數を示すのみにて、丁の分界明ならざるも、大體の指南たるに足らん、

(六) 詩句の省略したる分は……を以て示し、省略しても他篇にある分は、その旨を

記す、又全く省略せし分もあり、その多くは對句修辭中の故事等にして、その省略は内容の上には大なる缺陷にはならざるべし、

(七) 詩句の和訓は、下段各句の下に記す、この和訓は勉めて木版本の讀方に據りしも、寛文年間の假名遣にして、その後改められしものは、後の風に従ふ（「なを」を「なほ」とし、「覺ふ」を「覺ゆ」とする類）、又多少變更したる分あり、（「すること」の「こと」を省き、終止言を連用言に改めて次の句につゞけしなど）、但し全體としては當時の讀方を保存す（「韻を次ぐ」の如き）、

(八) 和訓には、難讀の漢字と佛教用語は、大抵皆かながきにし、以てふりがなの用をも兼ねたり、漢字の字音は勉めて正音に注意せしも、全然誤なしとは保し難し、

(九) 和詠は、辭句に即しての和譯にあらず、自由に意義を傳ふるを主として一々の字

義に拘らず、又前後轉置せる分あり、又對句の修辭と故事とは、多くは考慮に入れず、此等は和歌に適せずと思へばなり、又和詠なき少數の詩篇は、題目のみを記して、詩句を錄せず、本書は和詠を主として出發せしを以てなり。

(二) 和詠としたる和歌は、編者が、元政上人の心を汲むを心として、自己の力量内にて試みしもの、主として外國航路中の閑に草せしもの、歌人ならぬ編者の作として専門家の笑となるも驚くまじ、但、漢詩と西洋詩を和詠したる數に於ては敢て人後に落ちざるのみ、

目次

目次	頁	和詠歌數	中重出
信行篇……………	一	三七	一〇
回向篇……………	一五三	四一	〇
孝心篇……………	一七九	一三六	四
病身篇……………	二六七	六九	一三
閑居篇……………	三一七	二三〇	九
雅懷篇……………	四五二	二二三	一

吟遊篇	五九三	三九	一
四季篇	八六一	一七六	七
物象篇	九七一	九六	二
禮讀篇	一〇三七	二四	一
身延行記	一〇五五	七〇	〇
艸山集詩篇索引目次	一〇九五		

信
行
篇

本書の校正をはじめて

(昭和十七年八月十三日)

すなほにも法のことわり身にしめし
君がいのちのきよくけだかき

地中海にて

(昭和十三年九月中旬)

ふるさともあふぐ法をもとにする

君がうたこそわがたまのこゑ

君がたま驚のみやまにゆききせし

そこよりはるか西のこのうみ

茶にさめつしかも酒のみ艸山の

集よむわれを君なにとみん

信 行 篇

八、和歐陽讀書詩（二四ノ六）

歐陽が讀書の詩に和す

脱俗入無爲

俗を脱して無爲に入る、

餘習未釋卷

餘習いまだまきをすてず、

病來雖力衰

病みきたりて力おとろふと雖も、

轉書猶忘倦

書を轉ずれば、なほ倦むことを忘る、

世をすててなほすてかねぬ女のみち

やまひの身にもまきをはなさず （病身篇重出）

多羅辨偏圓

たら（經之）偏圓を辨じ、

名義析梵漢

名義梵漢をわかつ、